

帆樫成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.33

「帆樫成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。
人が多く出入りする活気ある「みなと」を
イメージしました。

CONTENTS

| | | |
|------------------|---|-------|
| 特集1 | 開館10周年記念事業 友好提携の西安博物院と 古都西安を訪ねるツアーの開催 | P.2~3 |
| 特集2 | 新潟市・沼垂町合併100周年記念展 沼垂 | P.4 |
| 歴史さんぽ | 栗ノ木川跡をたどる | P.5 |
| おすすめの一冊 | 「海鳴る 空映える 風わたる街で 聞き書き 一 戦争を生きた新潟の女性たち」 | P.5 |
| みなとびあ 研究notes | 「北濱新聞」第一号の記事 | P.6 |
| 館長日記 | 「旅愁」作詞者の名前 | P.7 |
| 収蔵資料紹介 | 「現代新潟風景画展」出品作家作品展 | P.7 |
| 博物館 あちらこちら | 早川堀(旧舂下川口) | P.8 |



新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆樫成林

Vol.33

【たいけんのひろばプログラム】

楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

| 日時 | タイトル | 内容 | 申込み・対象・参加費 |
|-------------------------------|------------------------|---|----------------------------------|
| 1月25日 日 14:00~15:30 | 太陽と仲良く! 光が透ける窓飾りづくり | 光を通すトランスペーパーを使用して、色を組み合わせた美しい窓飾りを作ります。 | 1月15日(木)必着 小学生以上15人・無料 |
| 2月1日 日 10:30~12:00 | 親子で自然体験しよう冬 | みなとびあの冬の庭園で、自然に触れながらあそびます。 | 1月29日(木)必着 未就学児とその保護者先着15組・無料 |
| 2月7日 土 14:00~15:30 | とんぼ玉づくり | バーナーを使ってガラス玉のアクセサリをつくります。 | 不要・小学生以上各10人・100円 |
| 2月15日 日 13:30~15:30 | 押絵のおひなさまづくり | 布を使って、かわいなおひなさまをつくります。 | 不要・先着10人・無料 |
| 2月22日 日 14:00~15:00 | 稲穂でトンボづくり | 稲穂を使って、トンボの形をした飾りをつくります。 | 不要・材料がなくなり次第終了・無料 |
| 2月28日 土・3月1日 日 14:00~15:00 | バックヤードツアー | 収蔵庫や資料整理室など、みなとびあの裏側をのぞいてみましょう。 | 不要・無料 |
| 3月7日 土 13:30~15:30 | 食べもので 絵の具をつくろう | くだものや野菜など身の回りの食べものを使った自作の絵の具で、絵を描いてみましょう。 | 不要・先着20人・100円 |
| 3月8日 日 13:30~15:00 | むかしのあそび お手玉・手あそびしよう | あやとりや手あそびなど、むかしながらのあそびを楽しめます。 | 不要・無料 |
| 3月28日 土・29日 日 14:00~15:30 | 高機で裂き織りをしよう | 高機を使って機織り体験をしてみましょう。 | 3月26日(木)必着・ 小学3年生以上各5人・200円 |

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。締切は必着です。プログラムは予定となっていますので、詳細は当館までお問い合わせください。

現在開催中 企画展

合併100周年記念展「沼垂」

新潟市との合併100年の節目を記念して、沼垂の歴史を紹介します。

会期 2015年
1月10日(土)~2月8日(日)
休館日 1/26(月)・2/2(月)
観覧料 無料 *常設展の観覧は有料です。



関連イベント
■ 展示解説会: 毎週日曜日、午後2時~3時
■ 関連講演会: 全2回
内容: ①1月17日(土)「川を越えて-沼垂と新潟-」
伊東祐之(当館副館長)
②1月31日(土)「沼垂のまつりと民俗」
渡邊久美子(当館学芸員)
時間: 13:30~15:00
会場: 本館2階セミナー室
申込: 不要。直接会場へお越しください。
資料代: 100円(資料のない回は無料)

次回 企画展

収蔵品展・新収蔵品展

資料収集保存事業の周知を兼ね、博物館の収蔵資料を紹介する収蔵品展と、今年度新たに受け入れた資料を紹介する新収蔵品展をあわせて開催します。

【会期】 2015年2月21日(土)~3月29日(日)
【休館日】 2/23(月)・3/2(月)・9(月)・16(月)・23(月)・24(火)
【観覧料】 無料 *常設展の観覧は有料です。

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。
【時間】 13:30~15:00
【会場】 本館2階セミナー室
【申込】 不要(当日受付・定員80人程度)
【資料代】 100円(資料のない回は無料)

◆1月の講座:1月25日(日)
講師:中村里那
「芳明筆「新潟町の凶屏風」
— 描かれた新潟の町 —」

◆2月の講座:2月22日(日)
講師:若崎敦朗
「「幕末の村」— 動揺する村の秩序 —」

《休館のお知らせ》2月16日(月)~2月20日(金) 施設整備のため休館いたします。

博物館 あちらこちら ◀早川堀(旧舂下川口)▶

早川堀は舂下川のバイパス水路として明治初年に造られた堀です。この二つの水路は町と河口を結ぶ水路として使われてきました。しかし水質汚染や船の利用減少から不要論が次第に高まり、昭和37(1962)年に早川堀とその下流の舂下川は完全に埋め立てられ道路や排水機場となりました。その後、舂下川部分の跡地に昭和61(1986)年に新潟の堀の景観を象徴する施設として、新たに河渡などを加えた水路が再建され「早川堀」と名付けられました。また昨年5月には早川堀を埋めた早川堀通りに早川堀をイメージした水路も整備されました。現在「早川堀」は博物館を訪れる人々にかつての新潟の景観を偲ばせる場所となっています。



編集後記 本号は開館10周年記念事業の一つ「西安ツアー」について特集しました。また、表紙はボランティア企画の一大イベント「みなとびあ10周年感謝祭」の様子です。それぞれ、みなとびあを介した人びとのつながりをいまい度確認する機会になったと思います。さらに2014年は、新潟市と沼垂町の合併から100年の節目でもあり、現在、みなとびあでは企画展「沼垂」を開催中です。みなさまのご来館を心よりお待ちしております。(中村)

お問い合わせ・申込みは博物館まで…

新潟市歴史博物館 みなとびあ
住所: 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
Tel: 025-225-6111 Fax: 025-225-6130
E-mail: museum@nchm.jp http://www.nchm.jp
【休館日】 毎週月曜日、祝日の翌日
【開館時間】 (4-9月) 9:30~18:00 / (10-3月) 9:30~17:00



ボランティア企画「みなとびあ」10周年感謝祭
エントランスホールにてソプラノ&琴「和み時間」の演奏

■ 帆樫成林「はんしょうせいりん」第33号
■ 編集・発行/新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
■ 印刷/株式会社ウエッパ
■ 発行日 平成27年1月23日

友好提携の西安博物院と 古都西安を訪ねるツアーの開催

小林 隆幸

◆はじめに

開館一〇周年を記念して、十月十一日(土)〜十五日(水)までの期間、当館と友好提携にある中国西安博物院と西安の史跡を訪ねるツアーを開催しました。名づけて「西安博物院と古都西安の魅力を訪ねる充実の五日間」です。企画に賛同した市民ら計一八名で、新潟空港から一路西安へと向かいました。西安とかつての長安へは、新潟から上海経由で計五時間三〇分ほどのフライトです。何か月もかかっていたとどりの着いた遣唐使のことを思うと今は夢のような時代になりました。

当館は平成十六年に開館し、同年に西安市の協力を得て、兵馬俑二体を含む「長安文物秘宝展」を開催しました。これは新潟市と西安市のスタッフが共同でつくり上げた展覧会です。この開催をきっかけに、西安市の西安博物院が開館した二〇〇七年に両館は友好提携しました。ツアーを一〇周年記念事業に選んだ理由は、「長安文物秘宝展」開催から一〇年目にあたることに加え、日中間の険悪な状況の中、友好を掲げ、文化・市民交流として中国を訪ねることも大切だと考えたからです。

◆西安博物院の見学

西安博物院では、私たちが乗ったバスが到着するのを、王鋒鈞副院長が駐車場まで出迎えてくれました。王副院長は「長安文物秘宝展」の際に随員として一か月ほど新潟で過ごされています。それも、新潟からの訪問をとっても喜んでくれています。

到着後、私たちは収蔵庫に通され、文物に直接触れる体験をしました。文物



西安博物院での記念撮影

が目の前に置かれ、手袋をして手に取り、質感を確認しながらじっくり観察しました。先進的で華やかな中国の古代王朝を伝える青銅器や陶器、金製品などを、緊張しながらもその感触を楽しみました。その後、解説員の案内で展示室を見学しました。西安は秦・前漢・隋・唐など中国統一王朝の都でした。各王朝を代表する文物と歴史の解説が中国語から日本語に通訳され、それをイヤホンで聴きながら観覧でき、言葉の障害がなく見学を楽しめました。

◆西安歴代王朝の陵墓を訪ねる

今回は、日本人ツアーでは訪れることの少ない、秦・前漢・唐の古代王朝の陵墓を訪ねました。秦の始皇帝陵、前漢四代皇帝景帝の陽陵、同五代皇帝武帝の茂陵、武帝時代の將軍であった霍去病の墓、唐三代皇帝太宗と則天武后の合葬墓である乾陵、則天武后の孫娘の永泰公主の墓など、世界史の教科書にも登場するような人物の陵墓や墓を巡りました。

秦の始皇帝陵は、一辺三五〇メートル、高さは七六メートルの方錐形をしています。つくられた当初は東西四八五メートル、南北五二五メートル、高さ二一五メートルと推定されており、墓としての規模は面積・容積ともに世界最大です。地下には広大な墓室(地下宮殿)があることがボーリング調査で確認されているとのことです。始皇帝が即位した紀元前二四六年から造営が始まり、始皇帝死亡後の紀元前二〇六年に完成したとされます。



秦の始皇帝陵

◆友好の持続を祈念して

今回のツアーは、日本の歴史や文化と比較しながら中国・西安の歴史を学ぶ機会になりました。日中間の心配をよそに、旅行中、出会う中国の方々には私たちに好意的でした。それぞれの国の歴史や文化には優劣はなく、尊重し、学び合うべきことが数多くあります。冷めた両国間で開催されたツアーであるからこそ、今回はそのことを充分に感じ取ることができました。

当館と友好提携にある西安博物院は、規模も内容も充実した博物館です。教育普及やボランティアの導入など中国において先進的な活動を行っています。そして二〇一七年には、友好提携一〇周年を迎えます。アジアに面した日本海側拠点都市・新潟市の博物館としても、この交流をさらに進め、両館(院)の協力関係を深めていきたいと考えています。

(こ)ばやし たかゆき 学芸員

始皇帝陵の特色の一つに有名な兵馬俑があります。死後の始皇帝やその地下宮殿などを守るための軍団です。等身大の写実的な兵士や馬の俑からなり、その数は八千体にも及びます。

前漢四代皇帝景帝の陽陵、五代皇帝武帝の茂陵ともに方錐形をしています。始皇帝陵と同じく、地下を掘り下げたところに遺体が安置されています。前漢代の陵墓では茂陵が最大で、一辺約一六〇メートル、高さ三〇メートルほどです。前漢では、皇位に就くと同時に国家予算の三分の一を投じて陵墓の築造や副葬する財宝の収集を始めるため、在位期間が長く、前漢王朝が最も栄えた時代の武帝の茂陵が最大で、副葬品も豪華だったようです。ただし茂陵は何度も盗掘されたため、その全容を明らかにすることはできません。後に見つかった副葬品などは茂陵博物館で展示されています。武帝は北方民族である匈奴を攻め、その時に活躍した將軍が衛青と霍去病で、衛青の墓も霍去病墓とともに近くにあり、霍去病墓に接して茂陵博物館がつくられています。

秦始皇帝の兵馬俑に代表される人や動物などの粘土でつくられた焼き物の俑は、漢代の陵墓にも見られます。ただし等身大ではなく小形化されています。四代皇帝景帝の陽陵では、発掘調査によっておびただしい数の俑を納めた陪葬坑が発見されました。ここに地下博物館が整備され、生々しい出土した状態を見学することができます。ここでの人物の俑が一風変わっており、腕は木製のはめ込み式で、織物の衣類をまとっていたようです。木製の腕と衣類は腐食し残っていません。人物のほか、馬や豚などの俑も見つかっており、そのユーモラスな表情は見どころの一つです。

唐代の陵墓は「山によりそい陵をなす」といわれているように、山そのものを墓に見立てて陵を築いています。山の威容で壮大かつ荘厳に見せるとともに、墳丘を築く必要がないことから省力化がはかられています。乾陵のスケールもまさに壮大で、参道には葬儀に参列した異民族の特使やベガサスに似た天馬など、数々の石像が配置されています。

乾陵の陪葬墓の一つである永泰公主墓は、陵墓とは異なり盛土して築かれています。永泰公主は則天武后の孫娘です。発掘調査によって、内部に見事な壁画が見つかっています。壁画は当時の人々の姿や風習などを伝える貴重な資料になっています。

中国古代王朝の陵墓には、死後に復活し前世と同じような生活を営むという来世観念がみごとに盛り込まれています。そのため、地下宮殿を設けたり、生活に必要な用具や施設を実物と模型によって取りこぼすことなく副葬したりしています。

日本の古墳では陵墓の調査はできず明らかではありませんが、形象埴輪で生前の様子を表現したり、宝器などの威信財や武器・武具、工具類など数多くの品物を副葬したりする例が、主に大古墳で見られます。しかし、中国の陵墓に比べて来世観念は読み取りにくい状況です。また、日本の古墳では墳丘を築いたその中に棺を埋葬しますが、中国では墳丘の下の地下を掘りこんで埋葬するという違いもあります。



前漢5代皇帝武帝の茂陵



霍去病墓(茂陵博物館)



前漢4代皇帝景帝の陽陵



陽陵地下博物館の陶俑



唐3代皇帝高宗と則天武后の乾陵



永泰公主墓

新潟市・沼垂町合併100周年記念展『沼垂』

渡邊久美子

昨年、新潟市と沼垂町が大正三(一九一四)年四月一日に合併してから、一〇〇年目を迎えました。

日本海に面し、信濃川をはさんで対岸に位置する新潟と沼垂は、江戸時代には、それぞれ長岡藩(のち幕領)と新発田藩の支配下にあり、町人たちは、湊をめぐって度々対立してきました。明治になっても、新潟と沼垂の利益をめぐるといはず、北越鉄道の終着駅である沼垂駅の開業にあたっては、決定を不服とした新潟の住民が爆破事件を起こすなど、両者のわだかまりは深いものでした。こうした対立感情を乗り越えて合併は果たされ、現在の新潟市発展の礎となります。昨夏には、合併一〇〇周年を記念して、「萬代橋イルミネーション」、「萬代橋de100年婚」などの、市を挙げた記念イベントが盛大に開催されました。



萬代橋de100年婚の様子

沼垂の地名は、『日本書紀』に記された淳足(みこと)に由来すると考えられています。大化三(六四七)年に置かれた淳足柵は、大和朝廷の蝦夷対策の拠点であり、その所在地は、現在東区になっている通船川右岸の王瀬(みづせ)河渡(かたがは)周辺が有力な候補地とされています。その後大和朝廷は統治のため行政組織を定めた国郡制を制定し、沼垂の名も郡の一つとして登場します。

平安時代には、信濃川右岸にあったとされる国津の蒲原津が盛んになります。蒲原津は、越後各地の貢納物を集めて京へ送る津です。内水面を通じて集められた貢納物は、蒲原津から日本海を渡り、敦賀、琵琶湖のルートを経て京へ運ばれました。蒲原の地名は、現在も旧沼垂町域の蒲原町に残っています。

中世になって、沼垂郡は消滅し、沼垂は湊や町を示す地名に変化していきました。陸路、海、川に面する水上交通の結節点である沼垂は、周辺の湊とともに南北朝時代から戦国時代にかけて戦いの場になりました。蒲原津と阿賀野川右岸の沼垂湊、戦国時代に蒲原津の衰退とともに登場した新潟湊を合わせ、三つの湊は三ヶ津と総称されます。

江戸時代に入り、阿賀野川右岸に湊を持つ沼垂は、溝口氏の治める新発田藩の領内になります。藩内唯一の湊として蔵所が置かれ、年貢米回送の拠点となりました。しかし、寛永八(一六三二)年、洪

水によって阿賀野川が信濃川に合流し、阿賀野川右岸の王瀬に位置する沼垂町は、川の水によって土地を削られ移転を余儀なくされます。王瀬の北へ移りますが、その後阿賀野川河口がふさがり、湊としての機能を果たせなくなると、信濃川河口を湊とする町づくりのために移転を繰り返します。三度目の移転先の大島、四度目の蒲原でも川に土地を浸食されたため、延宝八(一六八〇)年に故地である王瀬に湊と町をつくらうと工事を始めます。しかし、湊の機能低下を危惧した新潟町が工事を中止するよう幕府に訴え出、沼垂町はこの訴訟に敗れます。王瀬への移転を断念せざるをえなくなった沼垂町は、湊町として生き残るため最終的に現在の粟ノ木川河畔に移転しました。湊をめぐるといえず、争いはその後も続きますが、延宝の訴訟に敗れた沼垂町の訴えが認められることはなく、沼垂町は商業港としての機能を失っていききました。

明治になると、沼垂の人びとは、米産地帯の農村と内水面によって結ばれた利を生かし、醸造業を中心に産業を発展させます。町が大きな進展をみせたのは、明治十九(一八八六)年の萬代橋の架橋と、北越鉄道の沼垂駅開業です。明治三十七(一九〇四)年には流作場に新潟駅が開業し、交通路の整備、鉄道の敷設によって、沼垂町と新潟市を往来する人びとの数が増加しました。明治二十二

年、沼垂の地名は、『日本書紀』に記された淳足(みこと)に由来すると考えられています。大化三(六四七)年に置かれた淳足柵は、大和朝廷の蝦夷対策の拠点であり、その所在地は、現在東区になっている通船川右岸の王瀬(みづせ)河渡(かたがは)周辺が有力な候補地とされています。その後大和朝廷は統治のため行政組織を定めた国郡制を制定し、沼垂の名も郡の一つとして登場します。

歴史さんぽ



栗ノ木川跡をたどる

現新潟市中央区栗ノ木バイパスあたり



栗ノ木川/昭和27年から30年代ごろか 撮影:山口賢俊

沼垂展で展示中の古写真は、川を船が行き交うかつての沼垂町の姿を伝えています。町中を流れる水路は、信濃川や阿賀野川、その支流、大小の潟などを通じて海路や平野部の村々を結んでいました。こうした水路はモータリゼーションの到来や排水機場の整備とともにその役割を終え、また地盤沈下による浸水被害もあり、昭和30年代に埋め立てが進みました。現在、その跡地は道路や公園となっています。

現在の栗ノ木バイパスの位置にあった栗ノ木川は古くは栗ノ木通と呼ばれ、幾多の支流を集めて亀田郷を南北に貫流する河川でした。亀田郷の低湿な地域を最短で結ぶ交通路として、船を使った物資の輸送に利用されました。

もともと沼垂町は、江戸時代初めには阿賀野川河口東岸に立地し、新発田藩の年貢米が集散する湊町として繁栄しました。その後、信濃川河口の権利をめぐるといえず、争いはその後も続きますが、延宝の訴訟に敗れた沼垂町の訴えが認められることはなく、沼垂町は商業港としての機能を失っていききました。

栗ノ木川岸に移転した沼垂町の人々の多くが、生活の中で船を使っていたようです。明治10(1877)年「皇

国地誌』には沼垂町の戸数として合計1,435戸、船として海船計48艘、川船1,276艘とあります。沼垂地内の耕地への移動に使われたり、内水面での漁業に使われたりしたと思われます。栗ノ木川筋にはこうした船を作る多数の船大工がいて、明治初めの蒲原村では物産として「板合船50艘」とあります(『皇国地誌』)。沼垂町の酒・味噌・しょう油などの醸造業やその関連業の発展には、水運の便があり、新潟港に近く、原材料・商品の輸送に適した立地だったことも背景にあったと思われます。

栗ノ木川は昭和42(1967)年から44年にかけて下流部のせきとめ、埋め立てが進められ、道路化工事が始まります。栗ノ木バイパスは昭和48年から順次開通します。バイパスに沿う道路を歩くと、船が行き交った時代の痕跡を見いだすことができます。道筋には、味噌や酒の醸造場が建っています。交差点には「栗ノ木橋」「万国橋」など橋の名が、国道113号と交わる万国橋交差点の埠頭側の歩道には往時の橋の欄干が残ります。沼垂東4の交差点近くに立つ「沼垂定住三百年記念の碑」には、栗ノ木川の岸辺に移転した歴史が記され、往時をしのばせるよすがとなっています。

森 行人(もり ゆきひと 学芸員)

おすすめの1冊

海鳴る空映える 風わたる街で 聞き書き―戦争を生きた新潟の女性たち



海鳴る 空映える 風わたる街で 聞き書き―戦争を生きた新潟の女性たち 編集・発行 新潟女性史クラブ 2014年7月

太平洋戦争が終わって、今年で七〇年になります。戦時下の暮らしを自らの体験として語る人は少なくありません。新潟の女性たちの近代を語り続けてきた新潟女性史クラブが、一九二六から一九三八年に生まれ、戦時下を少女や若い女性として生きた七三人(ほか男性二人)から、経験した暮らしや出来事を聞き取り、まとめたのが本書です。

各人の語りは、戦争という巨大な営みに組み込まれた女性や子どもが、時代に流されたり、支えたり、抗ったりしながら生きたことを示しています。また、文字資料では決してわからない、一人一人に刻み込まれたシーンや感覚の記憶が述べられています。たとえば、探照灯に映えた障子の青、空から降ってきた米国のビラの白や黄といった色彩、配給された魚や松根油の匂い、学校工場のミンシヤや骨箱の音、八月十五日の感情などです。記録されない事柄や感覚までも伝えてくれる聞き書きをまとめた本書は、私たちの歴史認識の形成に大きな役割を果たす本です。

(伊東 祐之 副館長)

沼垂の歴史を追った「沼垂展」を二月八日(日)まで開催しています。展覧会は、古代から近代に至るまでの沼垂の歴史について、古文書や絵図、民具等で紹介し、長井雲坪、金子孝信、峰村リツ子といった旧沼垂町生まれの画家が描いた作品も展示しています。ぜひご覧いただき、奥深い沼垂の歴史に思いを馳せてみてください。

(わたなべ くみこ 学芸員)

『北溟新聞』第一号の記事

安宅 俊介

●はじめに

新潟県初の新聞は『北溟新聞』とされます。木版の綴で、官許。第一号は価三錢五厘。「新潟懐古資料」には「部数も漸く二百部内外が多い時でも三百部が関の山」とあります。発行者の坪井良作は医師の子で、漢学をまなび、明治以降は自由民権結社「自立社」を設け、のちには裁判所判事となつた人でした。

同紙のはじまりについては、回顧や聞き取りといったものも多く、はつきりとはしていません。たとえば、新潟市所蔵の同紙第1号の表紙には「明治壬申」(一八七二年)、奥付には「二月」とありますが、発行月を「三月」とするものもあり、諸説あります。こうした事情から新潟県初期の新聞史の検討には慎重さが求められますが、本ノートでは、同誌第一号の記事を二、三紹介します。



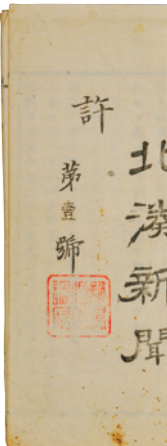
坪井子敬(良作)碑(白山公園内)

一「開化」

『北溟新聞』第一号は「新聞発行ニツケテ或人之ニ歌ヲ投セリ曰」とはじまります。その一歌は「花ノ如栄ユル御世ノ春ニアヒテ人ノ智モ開テソク」という、「開化」していく世を、開花に喩えたものでした。この冒頭が象徴するように同紙は「開化」啓発色の強いものでした。歌のあとにつづく記事も「新斥ノ洋学校追々盛ニ相成当春ハ寄宿生徒凡五十人余ニ及ヘリ仏語并数学ノ科モ相立可申候生徒伝信機出来候(略)」というものでした。このほか同紙には、牛肉や牛乳を食べることの功益や「米搗織物并挽物轉ノ器械」の発明、蒸気船完成の記事なども掲載されています。なお、こうした記事には小見出しにあたるようなものはありません。

二「金色ノモノ」

現代に生きるわたしたちにとって、不思議に感じる記事も掲載されています。明治四(一八七二)年十二月十八日、蒲原郡十五間村(現在は南区)の今井熊太郎は、庭に伏せ置いていた白石の上でワラを打っていました。すると石の下で「鳴動」がありました。そこで石を取り除くと「金色ノモノ」が見え、六〇から九〇センチ掘ると石がありました。石は「平円丈ケ一尺二寸巾八寸厚サ五寸」、重量は「六貫目余」で「クボミタル処」があり、そこは「真ノ金色」だったそうです。同紙によれば、この件は県庁に届



『北溟新聞』第一号(新潟市所蔵)

け出がなされたといえます。実在した何かの遺物なのか、それとも人目をひくための作り話なのかは分かりませんが、「開化」をうたい「官許」された同紙にこうした記事が掲載されていることは、この時代を考えるうえで興味深いところがあります。

三「鉄路」と「名和氏」

ところで、港町であった新潟において鉄道運送の必要性が意識されたのは、いつ頃のことだったのでしょうか。むずかしい問題ではありますが、同紙はすでに「アメリカ在留名和氏ヨリ贈リシ書ニ北越之急務ハ洋学ヲ開クト東京迄鉄路ヲ造リ運送便利ナラシムルニアルシ云々」とそれを伝えていました。いまだ品川駅―横浜駅間の鉄道仮開業すらおこなわれていないときです。

この「名和氏」は名和緩(道一)と考えられます。名和は長州藩の岩倉具視につかえた人で、新潟にも縁があり水原県参事をつとめています。渡米して明治六(一八七三)年ボストンにて客死。坪井との関係はよく分かりませんが、あたらしい「考えかた」が伝わったルートの存在がうかがえます。

なお、名和は、幼少の頃の市島謙吉とも奇縁がありました。市島は、のちに現在の新潟日報の源流のひとつ、明治十(一八七七)年創刊の『新潟新聞』主筆を明治十九(一八八六)年からつとめた人です。市島は『春城筆語』のなかで「忘れら

れた一人物名和緩氏」という項を立てています。それによれば市島は、名和の居所であった旧陣屋に「兎に角毎日通つた」とされ、名和から「本を教へられた」といいます。市島は「素読を受ける時は物やさしく懇切に教へられ」「若死をせなんだら無論台閣に列した人であろうと思ふ」と名和を評しています。

●おわりに

同紙のおわりには、家や土地、器具などの売却あるいは新規開店について「三字一行を四錢五厘で告知すること、また『新聞珍説風説等』があったら、『投新聞箱』に住所と名前を書いて投書すべき旨が書かれています。

紙幅の都合でわずかしこ紹介できませんでしたが、『新潟市史』資料編5で同紙一号を読むことができます。ご興味があれば、ぜひご覧になってください。

【おまな参考文献】

- ・松井敬「新潟県新聞史」『地方別日本新聞史』日本新聞協会、一九五六
- ・新潟市史編さん室「新潟市史」通史編3近代(上)、一九九六
- ・新潟市史編さん室「新潟市史」資料編5近代1、一九九〇
- ・新潟市史編さん室「高橋亀司郎氏旧蔵『北溟新聞』について―北溟新聞あるいは『新潟県治報知』以前―」『市史にいがた』七一九九
- ・新潟日報社編「新潟日報源流130年 越佐新聞略史 時代拓いて」新潟日報社、二〇〇七
- ・妻木忠太編「木戸孝允遺文集」泰山房、一九四二
- ・市島謙吉「春城筆語」早稲田大学出版部、一九二八

(あたか しゅんすけ 学芸員)

新潟市歴史博物館 館長 小林 昌二



館長日記

Diary from the Director of a Museum

「旅愁」作詞者の名前

先年、「いま、ケンドウとおつしやいましたがね、インドウのはずですよ。」というご注意を受けたいことがあります。それは唱歌「旅愁」作詞者を、私が「ケンドウ・キュウケイ」と言ったためです。「エー、そうなんですか!」と私は驚いて「はい、確かめてみます。」とお答えしたのですが、その折に連想したのは、子供のころに新潟市近郊の農家の方に、「ほれ、インガに嘸かまればよ。」と注意されたことでした。「インガ」とは犬のことです。

さて、調べてみると、「旅愁」の作詞者は、御指摘の通り犬童球溪でした。名は信藏、ペンネームは出身地熊本県の人吉市を流れる球磨川に由来しています。明治三十九年から四十二年まで県立新潟高等女学校で音楽の教鞭を執つていて、「旅愁」はその時に作られたのです。

犬童氏は、鎌倉時代に人吉荘の地頭であった相良氏の一族で、由緒正しい、九州では珍しくない姓のようです。また、中国・四国地方では犬神様を「いんがみさま」と言うそうです。故郷では



新潟中央高等学校(旧新潟高等女学校)にある「旅愁」の碑

「ケンドウ」などと呼ぶ人はいなかったのでしょうか、遠い異郷の新潟では私のように間違つて読む輩ばかりだったのかもしれない。そのつど「旅愁」の歌詞にあるように「さびしき思いに一人悩む」ということもあったでしょう。

ところが小林存は「越後方言考」で、私が連想した「インガ」を新潟市採集の方言としてあげています。「イヌ(犬)の訛言のインに接尾語の「ガ」が付いたもの」と説明しているのです。私の連想もあながち的外れではなかったようです。犬童球溪が九州と同じ訛りが新潟にもあることを知っていたら、「さびしき思いに一人悩む」ことなく、「旅愁」も誕生していなかったかもしれない、などと考えたりするのです。

収蔵資料紹介

「現代新潟風景画展」出品作家作品群

「絵画」は美術館だけでなく、みなとぴあにも収蔵されています。美術館はその造形性の評価を受けもつとすれば、歴史博物館は、制作の背景にあった人々の営みに注目します。みなとぴあにあって作品はどれも、新潟の歴史の一面を語る雄弁な資料なのです。

みなとぴあの前身である郷土資料館では、昭和四十九(一九七四)年度から二十九年間にわたつて、毎年秋に「現代新潟風景画展」が催されました。出品者は毎回三十人ほどの市在住画家たちで、彼らが市域に画架を立てて描いた同時代の風景画が展示されたのです。ときに作品が資料館に寄贈されることもあり、最終的に四十一人の七十一点が収蔵されたようです。これが、その後みなとぴあにひきつがれた同展覧会の出品作家作品群です。

西洋における風景画は、注文画を否定した十九世紀の画家たちが、ありのままの自然を受け入れることで「発見」した比較的新しい形式でした。そのため明治期に美術を「輸入」した日本人は、最初から野外の写生を西洋画の基本として受容したのです。新潟でも旧制中学の「立雲会」や、師範学校の「亜倶楽会」といった愛好会が、ほぼ独学で写生画を研究しています。

二十世紀に入ると自然主義的な風

景画は衰退するのですが、写生の指導は戦後の小学校で生き続けました。昭和二十六(一九五二)年に学習指導要領が全面改訂されると、自然を観察させる写生会が全国で流行したのです。

現代新潟風景画展には、図画や美術を教えた学校の先生がたくさん参加していました。戦後新潟で風景画が愛好された背景には学校教育の影響があったといえるでしょう。ただ、純粹に自然を追った戦前と違い、同展が趣意としたのは、失われつつある景観でした。風景画を描く行為が、新たな社会性を帯びるようになっていったのです。

美術において時代の同一性を示すのは、描かれた対象ではなく、意図と形式です。この作品群は、絵画の営みと博物館活動が結びついたユニークな資料なのです。

(木村 一貫 学芸員)



唐沢治一郎「'89春 市役所本館付近」(キャンパス・油彩、1991年)